

坂の上の雲のまち まつやま

明治という時代、
人々は坂の上の青い天にかがやく
一朵の白い雲を見つめて歩んでいった。

小説『坂の上の雲』とは

司馬遼太郎さんが四十代のほとんどをかけて完成させた小説『坂の上の雲』。物語は、正岡子規、秋山好古・真之兄弟の三人の人生をたどりながら「近代国家」の仲間入りをしようとした明治の日本を描いています。

何もかも新しくつくりあげねばならなかったこの時代は、学問さえすれば何者にもなりえた時代でした。貧しい下級武士の家に生まれた好古と真之は、軍人の道を選ぶことになり、好古は草創期の日本騎兵を育て、真之は日本海軍における近代戦術の確立者としてそれぞれの道を歩んでいきます。子規は新聞記者となり、近代俳句、短歌、文章の革新に力を注ぎました。

東洋の小さな国に過ぎなかった日本が、西欧諸国に追いつこうと懸命に国づくりを行なった姿から、多くのものが見えてきます。

それぞれの道で坂の上の雲を目指した主人公たち

まさおか しき
正岡 子規 (1867~1902)

俳人・文学者。松山藩士の子に生まれる。俳句・短歌の革新を唱えて伝統の文芸に新しい息吹を与え、近代文学の発展に大きな足跡を残す。松山にはじめて野球を紹介したのも子規であるといわれている。



あきやま さねゆき
秋山 真之 (1868~1918)

海軍軍人。子規とともに大学予備門で学ぶが、文学を諦めて軍人の道を歩む。日露戦争期に参謀となる。日本海海戦のときの電文「本日本気晴朗なれども波高し」は名文として知られる。



あきやま よしふる
秋山 好古 (1859~1930)

陸軍軍人・教育者で真之の兄。日本騎兵を育てて日露戦争の勝利に貢献する。退役後は松山の私立北予中学校(現松山北高校)校長として、後進の育成に努めた。



『坂の上の雲』を軸とした 21世紀のまちづくり

屋根のない博物館 フィールドミュージアム構想

松山市内には、小説にゆかりのある場所や主人公たちの足跡をはじめとする地域固有の貴重な資源がたくさんあります。この構想は、それらの魅力ある資源を発掘・再評価し、活用していくことでまちづくりを進めるというものです。

市内全体に右図のようなセンターゾーン、サブセンターゾーン、サテライトを設定し、地域主体の取り組みを通じて、地域の特色に磨きをかけています。これらのさまざまな魅力を持つゾーンを一体化することによって、市内全体を屋根のない一つの博物館と捉え、物語性のある魅力あるまちにしようとするのが、フィールドミュージアム構想です。

『坂の上の雲』フィールドミュージアム



坂の上の雲ミュージアム

『坂の上の雲』のまちづくりの中核となるこの施設は、さまざまな機能を備えた複合施設です。小説や主人公たちの魅力や当時のことを伝える展示機能をはじめ、小説ゆかりの資源が点在するフィールドミュージアムの魅力を紹介する機能、地域主体で行われる地域資源を活用した取り組みなどのまちづくりを支援する機能を備えています。

設計は建築家・安藤忠雄氏。三角形の大胆なデザインの中には、『坂の上の雲』のまち松山の魅力が凝縮されています。



窓からは、松山城の豊かな緑や萬翠荘が望める